

大学生が漁業・水産業の現場に入ること

——現場と学生双方に意義のある交流を考える——

学生団体水産人カレッジ 発起人
東京海洋大学 博士後期課程 1年 大屋進之介

水産人(すいさんちゅ)カレッジは、全国の漁村に訪問し水産業を直接現場で学びながら、その魅力や課題をSNS等で発信する学生団体です。設立から4年目の現在、東京海洋大学や北海道大学、水産大学校など12校の大学から76名の学生が参加しています。学校や学年、専門を超えて水産業に真剣な学生達が学びを深め、卒業後も協力して課題解決に向かうことを目的としています。活動の一つである漁村訪問では、全国の漁業や水産加工の現場に訪問し体験や手伝いを行いながら、机だけでは分からない生の声を聞いてきました。これまでに46箇所の漁村に訪れ、学生が持続的に訪問を続けている場所もあります。本稿では特に関係の深い2つの漁村を紹介するとともに、現場と学生の双方に意義のある交流を考えてみようと思います。

神奈川県逗子市にある小坪地区は、刺網漁やワカメ漁などを行う小坪漁港を有し、漁業者は漁業体験や漁師タクシーなど海業に関する活動も行っています。都内にも近いため、学生は学期中にも訪れることができます。現場ではワカメ収穫の手伝いや、漁師体験イベントの運営、漁師まつりの共催などを漁業者と毎年行っています。中でも親子向けの漁業体験では、学生が当日のイベント進行や獲れた魚の解説を行います。学生にとって深い学びの場になる事は当然のこと、漁業者にとっても慣れない接客や子どもの対応を学生に任せることができ、双方に意味のある取組みとなっています。

北海道広尾町は、十勝管内にある漁村地域

で、コンブ漁やシシヤモ漁などが行われています。町の漁業者のひとりが酪農家や猟師などといった地域内の他業種と手を組んだ観光協議会に参加しており、漁業体験ツアーの受け入れ等も行っています。学生は長期休みに訪問しており、これまでのべ70名が訪問しました。現場では、コンブ漁の手伝いや酪農体験、地域の例大祭への参加などを行っています。学生にとっては一次産業を広く学ぶことができ、現場にとっては、漁業の手伝いや祭りの担い手がいることで漁業や地域全体ににぎわいを創出することができ始めています。

一方でこれらの訪問には課題もあります。学生にとって移動にかかる交通費や滞在費はハードルになりやすく、移動の足も必要になります。安価で安全な宿泊拠点や、レンタカー等の移動手段が現場の近くにあることが望ましいと考えています。また学生がただの一時的な労働力と捉えられてしまう場合もあります。当然現場にお邪魔する身なので、学生はルールやマナーを厳守する必要がありますが、忙しい時期にただ働かされるのではなく、双方に意義のある交流であるべきです。そのためには学生と現場双方のニーズを把握し、役割と提供出来ることを互いに明確にすることが必要だと考えます。これからも互いにリスペクトを持った交流が持続し、漁業・水産業の課題に共に本気で向き合える関係でいられるように努めてまいります。

(おおや しんのすけ)